Bull. Mukogawa Women's Univ. 2022, **70**, *pp.*39–47.
武庫川女子大学紀要

“The Rover” 再考
―ブランウェル・ブロンテの作品における海賊―

西　山　裕　子
（武庫川女子大学教育学部教育学科）

Reevaluating “The Rover”
in the Context of the History of Pirates in Branwell Brontë's Angrian Poems

Hiroko NISHIYAMA

Department of Education, School of Education
Mukogawa Women's University

Abstract

Branwell Brontë's depiction of Alexander Percy as a pirate plays a significant role in understanding his poetical works in their historical context, for Branwell presents the original aspects of pirates of his time in his poem “The Rover.” Generally acknowledged as “Rougue” or “Rogue,” Branwell's portrayal of Percy throughout his poetical works and prose narratives foreshadows more than a mere main character and personae, and more than Branwell's enthusiastic pursuit of the Byronic hero. Even though newly published analyses of Percy by several critics show the romantic elements or aspects already present in Barnwell's earlier poems, we can still argue that, especially in the earlier phase of Branwell's works, the pirate figure of Percy is quite removed from the romantic figure in Byron's *The Corsair*. Examining the history of pirates alongside Byron's famous poem, Branwell outspeaks the originality of his works in “The Rover.” This paper focuses on why Branwell used a pirate as his personae and reexamines the received critical evaluation of his poems.

はじめに

近年、日本におけるブランウェル研究にはめざましく進展がみられる。従来の研究では、例えば、岩上はる子氏は、『ブロンテ初期作品の世界』において、ブランウェル・ブロンテ（Branwell Brontë, 1817-1848）の主人公アレグザンダー・パーシー（Alexander Augustus Percy, Viscount Elrington and Earl of Northangerland）を反逆者とみなし、陰謀、反乱、革命、アシャンティ族（Ashantees）との対戦を次々と演出したアングリア物語の政治的展開を好むブランウェルの趣向を特徴づけると論じる[1)]。このようなブランウェル研究と作品解釈を経て、最近の研究では「悪漢」パーシーにロマンス的側面を見出そうとする試みもある。菟原美和氏はアングリア戦争詩における自然描写のメタファーを解析し、ドラマチックに描き出されたアングリア国王ザモーナ（Duke of Zamorna, Arthur Augustus Adrian Wellesley, Marquis of Dourno, King of Angria）とパーシーとの関係を精緻に分析するが[2)]、その一方で、瀧川宏樹氏はブランウェルの詩作品全体の特徴のひとつとして自然描写が多用されていることに言及し、海をモチーフにザモーナとパーシーが対照的な位置に置かれていることなどに触れる。また、瀧川氏は海を舞台にパーシーが恋人オーガスタ（Augusta）を想い、「恋人たちの恋愛模様」を提示することなどから、表象としての海は舞台装置として機能し、作品の解釈において重要な役割を担うと論じる[3)]。とはいえ、ブランウェルと

パーシーに関してはダフィネ・デュ・モーリエ（Daphne du Maurier）の指摘にみられるように、シャーロット・ブロンテ（Charlotte Brontë, 1816-55）やエミリ・ブロンテ（Emily Brontë, 1818-1848）、さらには、アン・ブロンテ（Anne Brontë, 1820-1849）の初期作品の主要な登場人物と比べると十分な解明に至っていない[4)]。廣野由美子氏は、エリザベス・ギャスケル（Elizabeth Gaskell, 1810-1865）の伝記においても、ブランウェル像はシャーロットの目を通して語られているために、映し出される実体は客観性を欠いていることが危惧されると論じている[5)]。

従来、ブロンテの批評史では、ブランウェルの作品はシャーロットの初期作品との関連性において論じられる傾向にある。確かに、シャーロットとブランウェルはともに影響を与えながら、「11 年間文学的な共同作業を行なった」[6)]ことで恋愛や戦争というテーマを共有しており、詩作において互いの存在は不可欠であったと考えられているが、二人の関係や共同の創作活動の外側で、ブランウェルの作品は再評価に値するのではないだろうか。

本稿では、およそ 1832 年以降 1737 頃までに書かれたとされる[*1] ブランウェルの「アングリア詩」から、散文と密接に関わりのある詩「海賊船ローバー号」（“The Rover,” 1834/1837）を取り上げて、彼の詩作品の再評価を試みることを主眼とする。その方法として、まず、当時の海賊の受容と多様な解釈の可能性を指摘し、ブランウェルが海賊の歴史という史実を踏まえて創作を試みたことに触れたのち、短編「海賊」（“The Pirate: A Tale, by the Author of Letters from an Englishman,” 1833）で彼が描こうとした海賊像の意義を問い、パーシーの出自に纏わる言及がなされた「羊毛は高騰する」（“The Wool is Rising,” 1834）と題する短編に挿入された詩作品 “The Rover” を経て、散文と 1837 年版の詩との相互関係を考察する。その上で、最終的には、“The Rover” において、ノーサンガーランド伯爵になり次第に恋愛へと傾倒するまでの「海賊」ロウグ（“Rougue” or “Rogue”）[**2] ことアレグザンダー・パーシーに焦点を当て、ブランウェルが自身のペルソナである「ノーサンガーランド伯爵」（Earl of Northangerland）を通じて、ブロンテきょうだいとしてではなく、ひとりの作家として史実を反映させながら物語の再構築を重ねて自らの創作の世界を紡ぎだそうとした姿勢にこそ、彼の独自性がみられることを指摘したい。

1. 「海賊」たちとブランウェル

英文学の歴史において海賊のテーマは、文学作品の解釈と評価において重要な位置を占めていると考えられる。史実を鑑みれば、ブランウェルにとって、アングリア物語（Angrian saga）の「海賊」は、パーシーの舞台を海から戦場へと移行させるためのモチーフとしてのみ描かれているのではない。ブランウェルが海賊を描き出したことは、「複雑なアングリア物語を読み解く鍵となる」という指摘もあるように、「ブランウェルが海賊の話に精通していた」[7)]ことは、彼の詩作全体の評価に一石を投じる可能性がある。

では、「海賊」とは何か。海賊には諸説があり、英語表記も様々である。櫻井正一郎氏や竹田いさみ氏はエリザベス女王の治世に海洋覇権をめぐり海賊たちが利用されていたことに着目する。櫻井氏は「エリザベス一世の時代が私掠の時代であった」ことを強調し、私掠は常備海軍の代わりとなり、ヘンリ八世の時代に盛んになっていたこと、衰弱し始めたイギリスの交易の代わりとなっていたこと、スペインのカトリシズム（旧教主義）にイギリスのプロテスタンティズムが戦いを挑む形でイギリスがプロテスタント国家になる道を切り拓く役割をしていたと述べている。同様に櫻井氏は、海賊について二十世紀中頃に新しい見方が生まれたと指摘するが、一方で、旧い見方では「私掠は賛美され」、「私掠が大英帝国を造った」とされていると論じる[8)]。竹田氏の論考では、大英帝国の確立は産業革命によってもたらされたが、その資金元は「海賊がもたらした略奪品」であり、海賊は「近代国家の礎を築いた『英雄』として

[*1] 『ブロンテ初期作品の世界』における岩上氏の論考では、一般的には、初期作品の第二期は 1832 年から 1836 年までであると考えられてきたが、1837 年にアングリア物語は変質しつつあると指摘されている（141）。

[**2] ロウグの表記には 2 種類あると考えられている。コリンズの指摘によれば、創作の初期段階では “Rougue” となっているが、シャーロットが同じキャラクターを用いるときには “Rogue” と表記されている（xv）。

再定義」され、海賊行為が合法化され、さらには正当化されていることがわかる。また、海賊船は「ローバー」の別の表現として、「私掠船([p]rivateers = プライヴェティア)」があること、当時の情勢では王室が関与する海賊行為は「合法化」されていたことなどが明らかになっている。このような歴史の流れを踏まえるとき、海賊という〈英雄〉なしに国家の繁栄はなされないことになる[9)]。

ブランウェルの詩において、「海賊」には複数の言い回しがある。そもそも「海賊[船]」についての記述は、複数回にわたって試みがなされているが、その一つ目としてまず 1833 年に書かれた短編「海賊」があり、次に、1834 年に書かれた物語「羊毛は高騰する」のなかに挿入された詩作品で、海賊パーシーの略奪の様子が綴られている。さらに、その詩は、最終的に 1837 年の改稿時に部分的に修正されていることから、この 3 種類の「海賊[船]」にまつわる描写が、海賊パーシー像を具体的に解明する鍵となっていると思われる。

もっとも、「海賊船」という題名だけを鑑みれば、「海賊船ローバー号」は、まず、ノーサンガーランド伯爵が 1834 年 5 月に書いた詩の題名として挙げられるであろうが、この詩は 1837 年 3 月 9 日に修正が加えられ(このとき、P[atrick] B[ranwell] B[Brontë]の署名はない)、詩の終わりで PBB による 3 月 10 日付の署名が加えられている[10)]。1834 年版と 1837 年版とを比較すると、一部の語句で変更がみられる。例えば、“my Rover”[11)], の表記は、1834 年版(改稿前)では “My pirate ship”[12)]となっているし、さらに遡ると、1833 年の短編「海賊」では、海賊船 “a pirate” の表記は “a privateer” とある。まず、こういった言葉の選び方から、ブランウェルが詩作に入念に史実を取り込んでいる可能性が指摘できる[13)]。

海賊(“rover”)という言葉には、*OED* によれば、文字通り「海賊」を意味する “pirate” の他、“a sea-rover” や “a privateer” の意味があるが[14)]、歴史的コンテクストでこの言葉を捉え直すと、表記には複数あると言われている。櫻井によれば、「海賊」には、掠奪する者 “pirate”、掠奪行に出る “corsair” や、海で獲物を探しまわる “rover” がいる[15)]。加えて、カリブ海で恐れられた海賊には “ [b]uccaneers”、バイロン(George Gordon Byron, 1788-1824)が描いた地中海の海賊には “ [c]orsairs” が当てはまると指摘されている[16)]。これらの異なる表現において共通項となるのは、海賊は〈英雄〉とみなされ、実在したイギリス人探検家・海軍提督ドレーク(Francis Drake, 1577-1580)や海賊キャベンディッシュ(Thomas Cavendish, 1560-1592)のような「冒険家」でもあると定義されていることだ。

史実においてブランウェルの海賊を読み解く上で、「掠奪行に出る[コルセア] “corsair”」が「海賊」を意味する言葉として挙げられていることは、意味深長である。ブロンテ批評において、バイロンがブロンテ作品に与えた影響は切り離すことができないと考えられているが、アレグザンダー(Christine Alexander)とマーガレット・スミス(Margaret Smith)が編纂した『ブロンテ・コンパニオン』(*The Oxford Companion to the Brontës*)でも、ブロンテ姉妹同様にブランウェルもバイロンに熱狂的であったことから、パーシーはバイロニック・ヒーロー(a Byronic hero)のイメージと重ねられている[17)]。この点を発展させて考えると、海賊との関連においてバイロンの重要性を説くのは、ロバート・G・コリンズ(Robert G. Collins)である。コリンズは、「海賊は、バイロンに傾倒したブランウェルにとって重要な意味を持つが、『海賊』像もまた、まずはバイロンに、次にブランウェルに影響を与えるほど 18 世紀と 19 世紀はじめには重要な存在であった」と指摘する[18)]。海賊たちの恋愛というモチーフを踏まえると、バイロンの叙事詩『海賊』(*The Corsair,* 1814)の主人公コンラッド(Conrad)がバイロニック・ヒーローの典型であり、バイロンの詩ではロマンス的な側面が取り沙汰される傾向にあると考えられているため[19)]、ブランウェルの「海賊」にも同様のテーマが引き継がれている可能性も拭えないが、私掠という当時のイギリスの史実を顧みれば、バイロンの作品の主人公コンラッドに備わった特質とは異なり、ブランウェルの詩では勇ましい〈英雄〉という側面や、“The Rover” と同時期の「トランペットを　高らかに　鳴らせ」(“Sound the Loud Trumpet,” 1834/1837)のテーマにもみられるように、海賊として略奪行為を続けて領土の拡張に野心を抱き勝利することで、アングリア王国の建国に向けて貴族階級という目に見えざる権力を得たいと目論むパーシーの特徴がより顕著に物語に投影されていることがわかる。

このように、ブランウェルは当時の海賊たちの様相を自身の物語に巧みに組み込みながら、バイロンの海賊を模した形で英雄としての海賊を自身のペルソナにみたてて登場させている。短編「海賊」を経て

詩作品においてブランウェルが描き出そうとした海賊像は、自身のペルソナである海賊パーシーを独自の視座で国家の〈英雄〉に見立ててゆこうとするブランウェルの意思表示の表れなのではないだろうか。

2. “The Pirate: A Tale”（1833）におけるパーシー像

では、「海賊」たちとブランウェルの作中人物との関連を踏まえて、短編におけるパーシー像とその役割を確認してみよう。コリンズが指摘するように、ブランウェルの功績は作中人物としてのアレグザンダー・パーシーを創りだしたことにあると言っても過言ではない[20]。しかしながら、これまでの批評では、パーシーは、悪漢として位置付けられることが多い。例えば、トム・ウィニフリス（Tom Winnifrith）は『ブランウェル・ブロンテ詩集』（*The Poems of Patrick Branwell Brontë*）に附した註において「［1834 年にアングリア国王になった］徳の高いザモーナ［公爵］と比べると明らかに悪漢である」と述べ、パーシーが悪漢としての役割を担っていると言及する[21]。

パーシーは、グラスタウン物語とアングリア物語（Glass Town and Angrian saga）では、シャーロット・ブロンテが “a promising youth” と言及するほど「期待を担った」人物として描かれていたが、シャーロットと共同で執筆した初期作品『島人たちの話』（*Tales of the Islanders,* 1829）を経て、ブランウェル単独の著作「イギリス人からの書簡」（“Letters from an Englishman,” 1830-32）では、反逆を企てた首謀者かつ、裏切り者ロウグとして物語中に初めて登場したのち射殺されている。そして、1833 年の短編「海賊」で、彼は海賊船の船長として物語で「生き返り」を果たす。その理由は、ひとつに、シャーロットがパーシーの存在意義を認め、自身の物語のプロットに取り入れようとしたためであるが、パーシーの存在の「再生」がはじまる場面を次の引用文で検証してみよう。

> I［Bellingham］fell back on the bed breathless for it was Alexander Rougue. when I looked again. he was standing erect at one end of the area with a white handkerchief in his hand The soldiers were ranged opposite. . . .［A］t length Rougue called out in a firm clear but sepulchral tone “Gentlemen FIRE” My head grew dizzy. The soldieirs fired. I saw a bright flash and loud crash. He fell dead.
>
> Alexander ROUGUE
>
> was no more
>
> （*Works* 1: 238; spelling and punctuation in the original）

「イギリス人からの書簡」において、語り手ベリンガム（Bellingham）によって書かれた第 14 番目の書簡では、部下とともに政府軍に楯突いたロウグことパーシーの最期が、ベリンガムの視点で綴られる。この書簡では、ロウグの内面描写への言及は乏しいものの、文中の “sepulchral” という表現などの陰鬱な声は、読者に墓場を連想させる。パーシーの、“firm［and］clear” とされる声に墓場のイメージが込められているというこの一節から、ロウグとしてのパーシーは、死が迫りくる時ですら物怖じすることない、断固とした性質を備えていることがわかる。

ロウグのこのような特徴については、遡ること第 8 番目の書簡でも窺い知ることができる。彼は「背の高い青白い」男であり、「懸念や心配事で顔は皺だらけになり、かつてはハンサムだった容貌も苦難のために変化している」と述べられている。しかし、次の場面において勇ましく国民に向かって演説を行うとき、ロウグは「顔の色白さ」（“with a pale countenance”）、「苦境」（“worn into wrinkles with care and anxiety”）や「困難」（“his appearance . . . seemed broken down by anxiety”）から連想されるような軟弱な男ではない（195）。

> “Fellow country men! Banished from all places hated by all men Persecuted by my superiors and maligned by my inferiors I have here sought that Refuge and attention which has been refused to me every where before. . . . Yes my friends now Now is the time for action now is the moment of your freedom I behold it

> coming over these mountains like the rising Sun . . . . I propose to you that we instantly and quickly march up to the western mountains . . . . for effectually securing to us the invaluable blessing of Liberty”
>
> （*Works* 1: 195-96; spelling and punctuation in the original）

「イギリス人の書簡」におけるパーシー像を分析してみると、主としてロウグには三つの性質がある。彼の「雄弁で説得力のある」（“ [h]is great Eloquence and plausible language,” 196）演説は、一つに、ロウグの、己の行いに対する揺るぎ無い自信を示しており、それが彼の饒舌さを導き出している。第二に、彼の行動は自由への希求を意味する。そして最後に、この場面は、自由を得るためには力で相手を捻じ伏せてでも率先して行動しようとする彼の意志の強さを明示している。しかしながら、皮肉にも、彼のこういった性質が、国家にとっては排除すべきものとなる。引用の “ [b]anished,” “ [p]ersecuted,” “maligned,” “refused” という表現にみられるように、不協和音の火種となりかねない彼の特質そのものが凶器であるとみなされたために、国家権力によって彼は「追放」され、「迫害」され、「悪影響を及ぼすもの」とみなされ、結果的に彼の存在は「否定」されていることがわかる。

では、次の引用で、短編「海賊」において語り手ベリンガムによる、ロウグの生還の場面をみてみたい。

> Alexander Rougue has just returned from no one knows where He has bought a fine house in George Street where He lives in the utmost style of Magnificence. But what are his *means*. or from whence he draws his evidently princly income no one can guess This is well known that every acre of his paternal possessions has long long ago bid adeiu to him.
>
> （*Works* 1: 240; spelling and punctuation as well as italics in the original）

ノイフェルト（Victor A. Neufeldt）が編纂した『ブランウェル・ブロンテ全詩集』（全 3 巻）のうち、僅か 10 頁にしか満たないこの短編で、ブランウェルのヒーローの実態が読者に初めて解き明かされてゆく。ロウグが生還したのち、再び、ベリンガムの視点でパーシーの性質や、富を築いた方法などが描かれる。舞台は、グラスタウンである。パーシーことロウグの荘厳な大邸宅は、商船が絶えず行き来する広大なグラスタウンの港を一望することができる場所にある（これは、貿易が盛んな街で富を築き、大成した人物の象徴であることを示す）。先の引用文が示すように、パーシーには多くの謎がある。パーシーがどうやって財を成したのかについては冒頭のみでは分からない。ウィニフレッド・ジェラン（Winifred Gérin）はパーシーのこのような側面について、彼が生き返ったことはパーシーがブランウェルの散文および詩で中心的な役割を示すと論じているだけである [22)]。しかしながら、実は、この冒頭の数行がジェランやこれまでの批評家が論じることがなかったパーシー像を解明する手がかりを読者に示すように思われる。

ロウグが胡散臭い人物であることは、「どこから現れたのかわからない」ことに加えて、“eternal deceiver” （242）, “usual effrontery” （243）といった言葉で繰り返し暗示されている。彼は「今は提督である」（241）と短編「海賊」で主張するが、その風貌には、成功の陰には彼を白髪にし、顔にたくさんの皺をもたらした彼の「過去」が刻み込まれている。

「『イギリス人からの書簡』の作者による物語」というブランウェルの署名をヒントに、短編「海賊」でロウグが再登場した場面を読み進めていくと、彼の変容ぶりには、彼が海賊として “illegal system” （244）や “bloody conflict” （246）, “tricks” （247）を経験したことが関係していることが推測される。見通すような「鋭い目」（“his *eagle* eye,” 241; italics mine）をして、かつては雄弁な演説を行い、聴衆を魅了していたにもかかわらず、彼の変貌させるに至らしめた彼の過去とはどのようなものなのか。

第 3 節で詳説するが、ブランウェルの短編におけるパーシーに関するくだりをみれば、商人を哀れな存在であると捉えるパーシーの略奪行為は、のちに言及する詩と一貫性があることがわかる。「緋色の旗を掲げた海賊船」（“a Pirate carrying scarlet colours”）――語り手ベリンガムにとっては “suspicious vessel” （244）という表現で示されている――は「武装しておらず、積み荷を積んだ商船を見つけると襲

い掛かり」、「あたかも平和な取引を装うが実際は略奪した商品を売りさばいて」（244）利益を得る驚異的な存在だ。ウェリントン公爵（Duke of Wellington）の監視の目を回避するために「赤い海賊帽子」（“their red pirate handcercheifs on their heads,” 246; spelling in the original）を商人の衣装に素早く着かえ、偽装することもいとわない。積み荷を奪い、人質を惨殺し、相手の船に火をつけて鎮める。商船を爆発させ海に沈め、勝利の声を挙げながら再び赤い旗を掲げて帆を張り、泡立つ波を進んでゆく。このような冷却非道な行為は “bloodless”（241）や “the most violent and wanton［aggressions］”（243）という表現で暗示される。

このように、書簡や短編で暴かれてゆく「海賊」像を手掛かりにパーシーの諸相を再確認していくと、社会のアウトローではあるものの、勇敢なヒーローとして国益に寄与する存在として機能するという役割を、創作の初期段階でブランウェルはパーシーに与えようとしていることがわかる。

3. “The Rover”（1834/1837）における海賊パーシー像

これまで、パーシーことロウグの「海賊」物語におけるパーシーの役割を解釈してきたが、ここからは、海賊について詳細に述べられている詩 “The Rover” において、パーシーの役割をさらに精緻に分析していきたい。すでに本稿で説明した内容と重複するものもあるが、ブランウェルの作品はプロットが幾重にも折り重なる複雑な構成となっているため、いくつかの表記と詩の背景を再度、確認しておこう。

まず、詩の題名 “The Rover” とは、短編「海賊」で描かれるロウグの「海賊船レッド・ローバー号」（“The Red Rover”）のことである[23]。ブランウェルは短編「羊毛は高騰する」で、ノーサンガーランド公爵となり、爵位を得たパーシー（The Right Honourable Alexander Earl of Northangerland and Viscount Elrington）の、アングリアにおける冒険を描いている[24]。同時期にシャーロットは散文「私のアングリアとアングリアの人々」（“My Angria and Angrians,” 1834）を書いているが、二人が構築した架空の物語では、場所や登場人物の名称が共通する。「羊毛は高騰する」の注釈に、短編「海賊」と 1837 年に改稿されている詩 “The Rover” についての言及があり、「パーシーが海賊船ローバー号に乗って海賊として過ごした日々を回想している」ことが追記されている[25]。そこで、ブランウェルの散文物語とのこのような関連を踏まえて、初期の「アングリア詩」の一連の物語を基にした 1837 年版のブランウェルの詩作品 “The Rover” で、ごろつきとして社会の周縁へと追いやられているパーシー像の意義を問い直したい。

この詩は大きく分けて 4 つの部分から構成されている。初めに、荒れ狂う大海原をものともせずに、船長パーシー（のちのノーサンガーランド伯爵）の船である海賊船ローバー号が雄々しく航海する様子が描かれる。冒頭の核となるのは、勇敢に進むパーシーの船と、震えるように進む商船といった、二艘の船の対照的な様である。海賊船については “gallant” が使われ、商船については “quiver” や “prey”（“The Rover,” lines11-12, 以下、行数のみ示す）[26]といった表現で、二艘の船の関係性と今後の展開が示される。続いて、“timid sheep”（line 14）に準えられた商船に、“Lordly Lion”（line 16）たる海賊船が襲い掛かっていく場面に移る。その様はまるで “slaughter”（line 20）であると説明がなされたのち、船上での残虐な行為が具体的に描かれる。

海賊パーシーのひとつの側面（残忍な性質）を、散文における描写と比較しながら確認すると、部下を奮い立たせて武装させ、餌食に襲いかからんとするパーシーは略奪行為を顧みるどころか、好んで、かつ勇敢に、略奪という任務を遂行しているように思われる。固有名詞の “Conner”（line 25）とは、ノーサンガーランド伯率いる革命軍に属する部下アーサー・オコナー（Arthur O’Conner）を、“Gordon”（line 25）とは、パーシーの共犯者であり、バイロン卿の縁者の名前とされている[27]、キャプテン・ジュリアン・ゴードン（Captain Julian Gordon）を想起させる。また、“home”（line 28）は、商船を襲い戦利品を奪ったことでグラスタウンに戻ることを意味する。散文と詩にみられる双方の描写で共通して用いられている “red” や “scarlet” という海賊船に使われている形容詞には、“blood” をはじめとして、この詩にみられる “blaze” や “fiery” といった血塗られたイメージとパーシーの残忍性が含意されている。「イギリス人からの書簡」を経て、短編「海賊」や「羊毛は高騰する」の記述や詩にみられるパーシー像が相関関係にあるこ

とは言うまでもないが、海賊をモチーフとした詩を解釈する上で気がかりなのは、このような一連のイメージが海をテーマにしたロマン派の詩人たちの作品と共通している点である。

ブランウェルが傾倒していたとされるロマン派詩人バイロンは『海賊』で “red” という表現に殺戮の意味を込めており、その詩において海賊船は「血染めの旗」（“my［Conrad’s］blood-red flag,” Canto III. XV, line 492）を掲げている[28)]。バイロンが描いた海賊行為は、警戒心を抱かれずに相手の船に近づくために旗を入れ替えるというブランウェルが詩で用いたパーシーの戦術と重なるが、ブランウェルが描くこの戦闘の場面にはロマンス的側面はみられない。ユベール・デシャン（Hubert Deschamps）が指摘するように、「敵を欺く」ことは海賊にとって重要な戦闘手段であった[29)]。ブランウェルは当時の海賊の手口や社会情勢を踏まえて海賊パーシーを造形したと考えることも可能なのではないだろうか。

> We heed it not and I’m the first upon her shaking deck
> While all my band of gallant heart［s］ have followed at by back
> . . . . . .
> And Percy’s arm and Percy’s sword bath［e］ all that deck with gore
> An hour of tempest passes by the Galleon blazes now
> And smoke and slaughter crowd her deck and heap her bending prow
> Our swards are grown into our hands our eyes glance fiery light
> As faint we stagger oer the wrecks of that impetous fight
> Ye have done your work most gallantly that precious merchandise
> Convey upon our Rovers deck to be our well earned prize
> Then fire the ship and follow me to our own deck again
> To chase the coward wanderers across the stormy main（lines 37-54）
>
> （*Works* 3: 45; spelling in the original）

これまで検証してきたように、パーシーの略奪行為の残忍性は散文でも同様に確認できるが、ブランウェルの詩作品においては、勇敢な英雄としてのパーシーの側面がより強調されている。デシャンによれば、海賊社会で「船長は航海と戦闘を指揮した」と考えられているように[30)]、「わたし」パーシーもまた、果敢に先頭に立ち、相手側の「揺らぐ」（“shaking”）船体に指揮を取るために降り立つ。この場合の「揺らぎ」とは、商船の傾きと、武装集団に襲われた商人の動揺を示すものであり、パーシーの性質を際立たせるための対照的な意味を含みもつ。その場は戦場と化し、殺し合いが行われる。パーシーの勇敢な戦いぶりが固有名詞の繰り返しによって示されたのち、ガリオン船は爆破され、「戦利品」はローバー号に積み込まれる。縦横無尽に進むローバー号にとって商船は、引用にある「迷える子羊」（“the coward wanderers”）に準えられる弱者なのである。

さらにこの詩は、他者より自らを優位な立場に置き、武力を持って相手を屈服させようとするパーシーの特質を謳いあげている。また、この詩は、襲った船団の中で捕えた女性と婚姻するという手法を採ってでも爵位を奪い、ノーサンガーランド伯爵（貴族）となった、パーシーの好戦的な野望の原型となっている。このように、詩と散文とを関連づけてパーシーの造形を解釈すると、創作を重ねながら物語を再構築しようとするブランウェルの手法は、彼が史実やロマン派の詩に慣れ親しみ、自身の創作の世界の内側から「歴史」を見返そうとしているからこそなしえた術にほかならない。

結び

ブロンテきょうだいは、バイロンの他にもスコット（Sir Walter Scott, 1771-1832）を好んでいたが、スコットの著作にも『海賊』（*The Pirate,* 1821）があり、彼の海賊物語は 1831 年から 1832 年にかけて『ブラックウッズ・エジンバラ・マガジン』（*Blackwood’s Edinburgh Magazine*）の “Tom Cringle’s Log” にシリーズ

ものとして分散して掲載されている[31]。その熱狂的な読者であるブロンテきょうだいが一連の海賊物語に無頓着であったとは言い難い。また、パーシーの爵位に関して言及すれば、バイロンやスコットによって描かれた物語で「海賊たちは上流社会出身者か貴族であった」と指摘されている通り[32]、ブランウェルは海賊パーシーに、アウトロー以上の意味を含ませようとしていたことが窺える。

ノイフェルトが指摘するように、ブランウェルの詩は、1841 年 6 月 5 日から 1842 年 8 月 25 日までの期間に、『ハリファックス・ガーディアン』（*the Halifax Guardian*）、『ブラッドフォード・ヘラルド』（*the Bradford Herald*）、『リーズ・インテリジェンサー』（*the Leeds Intelligencer*）といった地方紙に 11 編（1847 年までにヘラルド紙とガーディアンで重複して掲載された詩 6 編ともう一編を加えると計 18 編）掲載されている。現在においても、ブランウェルが遺した一連の作品はブロンテきょうだいの作品と比べて十分な評価を得られていないかもしれないが、1842 年 10 月 1 日に『ハリファックス・ガーディアン』に寄せられた記事でその独自性が評価されるなど、詩人としての彼の評価は明らかである[33]。とりわけ、その大部分は、『ハリファックス・ガーディアン』に掲載されているし、同紙への投稿者には、シェリー（Percy Bysshe Shelley, 1792-1822）やサウジー（Robert Southey, 1774-1843）、リー・ハント（Leigh Hunt, 1784-1859）などがいる[34]。ブロンテきょうだいのなかでブランウェルの詩が初めて掲載されたということは[***3]、彼が時の著名な詩人たちと肩を並べて公に認められたということであり[35]、これを言い換えると、この点においても再評価の余地が残されていることになる。

コリンズは、「ブランウェルはパーシー像を通じて世に語りかけている」と指摘する[36]が、これは、ブランウェルは海賊パーシーを自身の代弁者に据えることで、ロマンスの要素に溢れる創作活動から離れて史実を反映させながらアングリア物語を再構築しようとしたことが一因となっているからではないだろうか。確かに、ブランウェルの初期作品において、パーシーはブランウェルの手になる海賊という一解釈にとどまる側面もあるかもしれない。しかしながら、ロマンスを彷彿させる「旧い」海賊像とは対照的な「新しい」海賊像を追い求めようとしたブランウェルの挑戦は、自身のペルソナである〈英雄〉パーシーの視点によって時の詩人たちの傑作を語り直そうとしたブランウェルの、作家としての決意を表しているように思われてならない。

＊テクストにはノイフェルト版『ブランウェル・ブロンテ全詩集』（*The Works of Patrick Branwell Brontë*. 3vols.）を用いている（原文からの引用には括弧付でページ数・行数などを記載した）。

本稿は、日本ブロンテ協会 2012 年大会（2012 年 10 月 30 日、於、大東文化大学）におけるシンポジウム「ブランウェル・ブロンテの詩を読む II」で発表した「戦争と恋愛のはざま――アレグサンダー・パーシー考」で扱った海賊パーシーのテーマを発展させたものである。ブランウェル読書会においてブランウェルの詩作品をご指導くださいました内田能嗣先生はじめ、示唆的なご意見を賜りました日本ブロンテ協会の先生方に心から御礼申し上げます。

引用文献

1）岩上はる子『ブロンテ初期作品の世界』開文社 , 1998, p. 83.
2）莵原美和「ブランウェル・ブロンテのアングリア戦争詩――ザモーナの凋落とメタファー」『ブロンテ・スタディーズ』第 5 巻 第 5 号, 2013, pp. 29-43.
3）瀧川宏樹「ブランウェル・ブロンテの詩作品における海の表象」『ブロンテ・スタディーズ』第 6 巻 第 3 号 2017, pp. 33-40.

[***3] ノイフェルト版『ブランウェル・ブロンテ全詩集』によれば、初めて掲載された詩はノーサンガーランド伯爵の署名による、1841 年 6 月 5 日に掲載された「天と地」（“Heaven and Hearth,”1841）である。掲載された詩のほとんどはペンネームで署名されているが、メルボルン首相（Melbourne）のホイッグ党内閣に言及した詩「メルボルン内閣について」（“On the Melbourne Ministry,” 1841）については本名である P.B.B を用いている（*Works* 3: 340）。

4）Maurier, du Daphne. *The Infernal World of Branwell Brontë*. 1960. Virago, 2006, p. 3.
5）廣野由美子「ブランウェルの破滅――その実相とブロンテ姉妹への影響――」『ブロンテ・スタディーズ』第 4 巻 第 5 号, 2007, pp. 15-21.
6）Conover, Robin St John. “Creating Angria: Charlotte and Branwell Brontë’s Collaboration.” *Brontë Studies Transactions*, vol. 24, pt. I, Apr. 1999, p. 16.
7）Harty, Joetta. “Playing Pirate: Real and Imaginary Angrians in Branwell Brontë’s Writing.” *Pirates and Mutineers of the Nineteenth Century,* edited by Grace Moore, Ashgate, 2011, pp. 56-57.
8）櫻井正一郎『女王陛下は海賊だった――私掠で戦ったイギリス』ミネルヴァ書房 , 2012, pp. 3-7.
9）竹田いさみ『世界史をつくった海賊』筑摩書房 , 2011, pp. 7-14.
10）Brontë, Patrick Branwell. *The Works of Patrick Branwell Brontë*. Edited by Victor A. Neufeldt, vol. 3, Garland, 1999, pp. 44-45.
11）同上 , p. 44.
12）Brontë, Patrick Branwell. *The Works of Patrick Branwell Brontë.* Edited by Victor A. Neufeldt, vol. 2, Garland, 1999, p. 29.
13）Brontë, Patrick Branwell. *The Works of Patrick Branwell Brontë.* Edited by Victor A. Neufeldt, vol. 1, Garland, 1997, p. 244.
14）“Rover, N（1）.” *Oxford English Dictionary,* Oxford UP, 2022, www.oed.com/view/Entry/168130.
15）前掲 8）, p. 13.
16）前掲 9）, pp.12-13.
17）Alexander, Christine, and Margaret Smith, editors. *The Oxford Companion to the Brontës.* Oxford UP, 2006, pp. 114-115.
18）Collins, Robert. G., editor. Introduction. *The Hand of the Arch-Sinner: Two Angrian Chronicles of Branwell Brontë.* Clarendon, 1993, p. xxx.
19）山川智恵子「*The Corsair* に見られる Byron の萌芽的自我――Byron と Conrad――」『聖徳大学研究紀要短期大学部』第 27 号 III, 1994, p. 64.
20）前掲 18）, p. xxiv.
21）Winnifrith, Tom, editor. Biographical Note. *The Poems of Patrick Branwell Brontë.* New York UP, 1983, p. xix.
22）Gérin, Winifred. *Branwell Brontë.* Thomas Nelson and Sons, 1961, pp. 48-51.
23）前掲 17）, p. 346.
24）前掲 12）, p. 30.
25）同上, p. 29.
26）前掲 10）, p. 44.
27）前掲 17）, p. 221.
28）Lord Byron, George Gordon. *The Corsair. The Complete Works of BYRON.* Edited by Paul. E. More, Houghton Mifflin Company, 1933, p. 362.
29）デシャン , ユベール『海賊』田辺貞之助訳 , 白水社 , 1965, p. 34.
30）同上 , p. 99.
31）前掲 7）, p. 46.
32）Lutz, Deborah. “The Pirate Poet in the Nineteenth Century: Trollope and Byron.” *Pirates and Mutineers of the Nineteenth Century,* edited by Grace Moore, Ashgate, 2011, p. 28.
33）Neufeldt, Victor A. “A Newly Discovered Publication by Branwell Brontë.” *Brontë Studies Transactions,* vol. 24, pt. I, Apr. 1999, pp. 11-15.
34）前掲 10）, Introduction, p. xix.
35）Barker, Juliet. *The Brontës.* Phenix, 1994, p. 371.
36）前掲 18）, p. xxxvii.

受理日　2022 年 12 月 5 日